

P1-039

A大学における看護系および非看護系学生における喫煙行動と認識に関する特徴

細野 恵子¹、杉浦 潤哉²、佐賀 嬉幸³、
中條 亜友未⁴

¹ 旭川大学保健福祉学部 保健看護学科

² 名寄市立総合病院

³ 町立中標津病院

⁴ 札幌北楡病院

【目的】

看護系および非看護系大学生における喫煙行動と認識の現状、および両群の比較により大学生の喫煙に関する課題を検討する。

【方法】

A大学における看護系および非看護系大学生1～4年生を対象に、2017年5～7月に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は喫煙行動、喫煙に対する認識（加濃式社会的ニコチン依存度調査票：Kano Test for Social Nicotine Dependence；KTSND、喫煙動機評価尺度：The Reasons for Smoking Assessment Scale；RSAS、ニコチン依存度尺度：Fagerstrom Test for Nicotine Dependence；FTND）、基本的属性とした。調査票の配布は教員に依頼し留置法にて回収した。分析は、看護系・非看護系学生間で喫煙行動、KTSND、RSAS、FTND得点を比較（ χ^2 検定、Mann-whitney U検定）した（ $p<0.05$ ）。倫理的配慮として所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

看護学生（以下、看護）248部配布・有効回答率92%、非看護学生（以下、非看護）293部配布・有効回答率78%であった。看護の現喫煙者17名7%、過去喫煙者6名3%、非喫煙者206名90%であった。非看護の現喫煙者22名10%、過去喫煙者8名3%、非喫煙者200名87%であった。看護のKTSND得点（平均値±SD）は喫煙経験者（現喫煙者＋過去喫煙者）14.6±5.2点・非喫煙者12.3±5.0点、非看護のKTSND得点は喫煙経験者13.9±6.6点、非喫煙者12.9±6.2点であった。KTSND9点以下の割合は看護27%、非看護30%。KTSND10項目の平均値を両群間で比較した結果、看護は“嗜好品”、非看護は“効用”に関する項目の得点が高かった。RSAS得点では看護・非看護ともに“快楽・リラックス”因子が他因子に比べ高く、両群間での有意な差は示されなかった。FTND得点では看護（53%）・非看護（50%）共に低依存の割合が最も高く、両群間での有意な差は示されなかった。

【考察】

看護・非看護系学生における喫煙者および非喫煙者のKTSND得点は9点を超えており、喫煙者はもとより非喫煙者もタバコや喫煙を肯定する態度や意識が高いと推測する。KTSNDの項目得点の比較から、看護系学生はタバコを嗜好品として、非看護系学生は効用に対する過大評価という認識をもっていることがうかがわれる。喫煙動機評価得点の結果から、両群においてタバコをリラックス対処法として用いていることが推測される。

P1-040

A大学における看護系大学生の喫煙行動と認識に関する実態調査

細野 恵子¹、中條 亜友未²、杉浦 潤哉³、
佐賀 嬉幸⁴

¹ 旭川大学保健福祉学部 保健看護学科

² 札幌北楡病院

³ 名寄市立総合病院

⁴ 町立中標津病院

【目的】

看護系大学生の喫煙行動とその認識に関する実態を明らかにし、喫煙行動に与える影響を検討する。

【方法】

A大学における看護系大学生1～4年生を対象に、2017年5～7月に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は喫煙行動、喫煙に対する認識（加濃式社会的ニコチン依存度調査票：Kano Test for Social Nicotine Dependence；KTSND、喫煙動機評価尺度：The Reasons for Smoking Assessment Scale；RSAS、ニコチン依存度尺度：Fagerstrom Test for Nicotine Dependence；FTND）、基本的属性とした。調査票の配布は教員に依頼し留置法にて回収した。分析は、喫煙経験者・非喫煙者間で喫煙行動およびKTSND得点を比較（Mann-WhitneyのU検定、Dunnnettの検定）し、喫煙者についてはRSAS・FTND間の関連（Spearmanの順位相関分析）を検討した（ $p<0.05$ ）。倫理的配慮として所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

調査票配布数248部、回収数243部97.9%、有効回答数229部92.3%。男性36名15.7%・女性193名84.3%、学年分布は1年生：58名25.3%、2年生：63名27.5%、3年生：60名26.2%、4年生：48名21.0%であった。喫煙状況は、現喫煙者12名5.2%、試し喫煙者5名2.2%、過去喫煙者6名2.6%、非喫煙者206名90.0%であった。KTSND得点（平均±SD）は喫煙経験者（現喫煙＋試し喫煙＋過去喫煙）14.6±5.2点、非喫煙者12.3±5.0点で、喫煙経験者の方が有意に高かった。性別では男性14.2±6.3点、女性12.2±4.8点で、男性の方が有意に高かった。学年別では1年生10.8±4.7点、2年生12.2±5.3点、3年生12.4±4.9点、4年生15.3±4.2点で、学年が上がるにつれて有意に高かった。年齢別では19歳以下11.2±4.8点、20歳以上13.6±5.1点で、20歳以上の方が有意に高かった。受動喫煙の有無別ではなし群11.7±4.6点に比べ、あり群12.9±5.3点は有意に高かった。現喫煙者のニコチン依存度と喫煙動機との関係では全ての項目において有意な関連は示されなかった。

【考察】

看護系大学生における喫煙に対する認識はKTSND得点の高さから、喫煙の有無に関係なくタバコへの認知の歪みが認められた。また、喫煙経験者・男性・20歳以上・上級学年・受動喫煙あり群の方がKTSND得点は有意に高い値が示され、認知の歪みを助長させる要因となることが示唆された。